ISSN 1344-8846

千葉看護学会会誌

JOURNAL OF CHIBA ACADEMY OF NURSING SCIENCE

VOL.25 NO.2 FEBRUARY 2020　第25巻第2号　令和2年2月

［原著］

幼児期に先天性心疾患手術を受ける患児の主体的なレディネス発達を促進する看護援助の考案　中水流　彩

急性期病院における中堅看護師の専門職組織人としての目標設定に向けた病棟看護管理者の支援行動指標の有用性の検証　能見　清子　吉本　照子

高齢者虐待に対する地域包括支援センター看護職の支援行動指標の有用性・実用可能性の検証　上原たみ子　吉本　照子　杉田由加里　飯野　理恵

摂食嚥下機能低下を認める特別養護老人ホーム入所者への経口摂取支援のための看護職役割行動指標の有用性・実用可能性の検証　清水みどり　吉本　照子

［千葉看護学会第25回学術集会報告］

会長講演
　看護実践を変えるデザイン力
　　―アクションとしての研究を考える―　黒田久美子

教育講演　安藤　和雄
　在地の自覚
　　―実践と研究の区別をこえて―

シンポジウム報告
　看護実践の変革を目指した研究的チャレンジ
　　―求められるデザイン力―

発表演題一覧（口演・示説・交流集会）

［2019年度総会報告］

2019年度千葉看護学会総会議事録

千葉看護学会会則

千葉看護学会会誌投稿規程

千葉看護学会会誌専任査読者一覧・編集後記　編集委員会

教育講演

在地の自覚―実践と研究の区別をこえて―

安　藤　和　雄（京都大学東南アジア地域研究所）

「実践」は外せない

実践は外せない。しかし，農学の分野では，「農学栄えて農業滅ぶ」（横井時敬の言葉と伝えられている）と言われてきた。農学部の大学時代から実践ということに非常に興味があった。

40年近く前の大学院時代，フィールドワークのきまった方法論はなく，頼りとなったのは学部時代に所属していた山岳部での山行計画の準備と山行中の記録をとる経験だった。山では，何時にどこ行ったとか，とにかく記録を取る。遭難したら，その記録がないと原因を探れないからだ。徹底的に記録を取ることを叩き込まれ，山から帰ると反省会をするというサイクルだった。

村の現実を見る

大学卒業後，1978年に青年海外協力隊員としてバングラデシュに赴任した。農村を豊かにしようと推進された緑の革命では，上層の人が富，技術を独占してしまう反省があり，赴任先のNGOであるBVS（Bangladesh Volunteer Service）では村のコミュニティー全体ではなく，個別に貧しい人たちだけをターゲットに取り組みをしようとしていた。当然ではあるが，貧乏な人だけで成立してる社会はなく，お金持ちがいて，お金持ちが貧乏な人を助ける調和と協調の伝統的ないろいろな習慣もあった。こうした村の社会の持続性をつくってきたそういう社会階層こえた相互扶助の関係，伝統的な技術は何百年も経てきた。ただ一つの欠点は，生産性が悪いことだった。80年代前後は，農業，農村の近代化理論を重視して，伝統技術が否定され，近代技術の導入がすすめられていた。赴任先の村では雨季に半年間，雨が降り続き，２～３メートル水が来る所で西洋野菜の作物などは育たない。現地の野菜品種や，３メートルや４メートルの草丈が伸びるような稲じゃないと生育できない。でも，そういうことを「緑の革命」路線は全否定してかかったいた。

緑の革命の失敗があって，外から見ている研究者たちは村のリーダーが悪いと言う。しかし，村のリーダーたちは相変わらずもめ事の仲裁とか，いろんなことをやっていて，村のリーダーたちがいなかったら村は回っていかない。私は，それを評価して，相互扶助を尊重したことが，バングラデシュで最初にしたことだった。「何をやっている」と配属先のBVSの代表には怒られたこともあった。「村の現実を全然見てないのに，そんなこと言ってどうするんだ」，これが，その後も，研究でずっとテーマにしてきたことで，外にいる人たちは，自分のバイアスで見がちである。

事実の記録

協力隊時代にもう一つよかったことは，手紙。当時は電話もなく，記録を付けて，日本の彼女に毎週，多いときに２通ぐらい送っていた。手紙が届くのに２週間ぐらいかかるので，記録を取ってないと齟齬が起きる。この前何を書いたかなと順序がわからなくなるので，カーボンコピーを取っていた。これが今の私のフィールドワークの原点になってる。

大学院時代，高谷好一先生から影響を受けて，「見たこと，聞いたこと，それをもとに自分で学ぶ」。これを叩き込まれた。事実の記録は大事である。当時，フィールドレターという方法をやっていた。自分が見てきたこと，聞いたことの事実を近しい大学院の友人に書いて送る。一番大切なのは，人に分かるような形で書いておく。自分の見たこと聞いたことを書いて，それにタイトルを付ける。そういう訓練をしていくと，知らず知らずのうちに体系的に物事が考えられるようになる。しかし情報の出所だけはしっかりとしておく。

在　地

我々は，現在をあまり意識してない，意識できない。当たり前だから，同時的にあるから。農村開発の中で，現在が無視されてるってことに気づき，在地という考え方を使うようになった。在地は，もともと日本史の中世の村の権力者みたいなことを表す言葉だったが，そんな言葉に留めておくのはもったいないと思い，新しく定義し直して使っている。

1986年頃，バングラディッシュの伝統的な農法は，６～11月の雨季の稲作。雨の降る前に，乾いた田で本田

doi : 10.20776/S13448846-25-2-P49

準備をして籾をばらまき，雨がふると湛水水田で稲が育つ乾田農法（ドライファーミング）。緑の革命では，乾季にポンプを使って水田に灌漑し，日本式に田植えをする湿地農法（ウエットファーミング）を行うようになった。ところが，田植えの後に乾田農法で使っていた除草用の馬鍬を掛けているのを目にした。「何だろう，これは」と大変ショックを受けた。日本では苗半作といわれ，田植え後の活着直後の稲を大事に扱う。これでは稲を痛めてしまうからである。

在来技術，外来技術という分け方を，農学ではしていた。バングラの赴任先の村の稲作農業はドライファーミングで，外来技術がウエットファーミングという訳である。しかし村を回ってて，農家にとってみたらそれはどうでもよいことに気づいた。技術は農学者がつくるものではない。技術を使う農業者，実践者が，自分たちがやりたいように作ったらいい。それで，在来技術，外来技術といった二法的な外部的な見方ではなく，在地の技術という，農家の主体性に着目した技術，在地の技術という概念を新しくつくった。そこにあるもの，そこにある存在を肯定しない限り，在地っていうものは見えてこない。

実践＝研究

農村開発とか農業開発では，皆，調査と分析をやり，現在をわかった感覚になる。しかしデータを取った時点で，データが現在は過去になる。進行形で動いているので，昨日のことは今日と違う。ところが，データを取ってしまうと現在は固定化されて客観化されるので，客観化したデータを分析できることになる。何をやってるかというと，過去を分析して未来のモデルを求めていることになる。

直観的で主観的な実践的解決しかないというのが，私の考え。実践＝研究で，直観力の働くことで問題解決がされる。実際そうなっている。問題は，どう説明するかということ。理論や分析は，他人を納得させるためだけの道具，そのぐらいのつもりでやらないと，主観としての行動（＝解決）と客観としての理論（＝説明）というずれを解消できない。このずれをどう解消していくかが，非常に大きな問題。農村開発において，問題が解決していくということは現在におきる変化が社会になじむ，なじむというキーワードの中で，どのようになじみ方を描写してくかというような気がしてならない。

実践者がすなわち最高の研究者だと思っている。なぜならば，実践の現場ほど，研究の最先端があるから。実践者は，表現をする手段が不得意なだけである。表現することが上手くなるためには，毎日日記書いて，読み直して，タイトル付けて，そういうことをずーっと繰り返してるうちに，人に分かるように説明できるようになる。

研究の理念

方法論より理念が大切。理念なき研究，理念なき学問は，本当は学問足りえない。

理念はどこから生まれるか。誰のため，誰が行う，主体は誰なのか，の問からだ。特に我々のような実践，問題解決を普段意識しながら研究をやろうとしていると，誰のための研究の成果なのか。こういう議論から理念や研究計画が生まれる。

絶対肯定からはじめる

科学的な分析方法を取っていると，往々にして存在してる社会そのものを否定してかかる。まずは絶対肯定して，そこから見えてくることからはじめる。大学院の講義では，地域研究大乗仏教論，菩薩像と親鸞を取り上げている。看護学でも可能なのではないか。

在地の自覚

地域研究は場の設定が大事である。場の設定は単純に言うと存在証明を行うことに通じるからである。

人は主体的存在で，そこで一番大事なのは，意思を対話の中で表現できること。場に入ると何が起こるか分からない。大学院生の中に悩む学生がいた。「俺，そんなつもりで来たんじゃないんだけど，何か違うな」とか。それに気がつくと，黙ってても問題が主体として飛び込んでくる。直観的な理解が出てきて，結局，客体なんて無くなってしまう。結局は，主体と主体との会話の中で，物事を見ていくしかなく，単純な客観的分析手法を取ってる限り，それは見えてこない。分析ではなく，共有。それは直観的理解の中でできる。直観的に理解する心を「在地の自覚」と呼んでいる。人が抱える問題に寄り添おうという心があるからこそ，人は人を受け入れる，それが，人間が社会性を営む源であると私は考えている。

対象そのものをニュートラルに見ることが，昔からの科学的な手法だろう。しかし多くの場合，問題が解決してないことが多く，できれば，解決への実践の自覚を持ってもらいたい。

研究対象を分析の対象である客体はなく主体として絶対肯定に認めていく。主体と客体という関係性を解消し主体と主体を，関係を結ぶことでお互いに解決への自覚が生まれる。自覚が芽生えれば実践に向かえる。

看護学へのエール

患者さんに文句言われてかーっと頭にくる時は思考停止をするとよいでしょう。これが不生禅です。盤珪（ばんけい）が教えた思考停止の極意だと私は思っています。

実践と研究を統合しながら，それを論文化するときに，一つの態度として，真実を伝える，真実がこうであるという考え方は置いておき，書こうとしていることに共感者を増やそうと思って論文化の作業にとりくめばよい。

看護学は，実践と研究の統合を考える上では，非常に優れたポジションにあって，真剣にその道を模索していくと，他の学問，他の領域ではないような，素晴らしい新しいアプローチ，研究のやり方，実践のやり方，実践者イコール研究者，これが，現実に可能になると期待している。

参考文献

・安藤和雄他：「実践哲学を基礎とした東ブータンにおける相互啓発実践型地域研究の試み―京都大学国際交流科目『ブータンの農村に学ぶ発展の在り方』現地スタディーツアー 2015年度報告集―」，ヒマラヤ学誌，40－76，2016

・思想の科学研究会編：『新版　哲学・論理用語辞典　新装版』三一書房，194－195．思想の科学研究会2012

・岩崎武雄：『存在論・実践論〔哲学体系　第二・三部〕』181－192，東京大学出版，1977

・安藤和雄：「場における当事者的関係性が進める実践型地域研究」『京都大学東南アジア研究所50周年記念21世紀の東南アジア研究―地球社会への発信』，103－105，東南アジア研究所，2015

・玉城康四郎：『盤珪禅師法語』（禅の古典８），65，講談社，1982

・古田紹鉄：「解説　不生禅」『盤珪禅師語録』（鈴木大拙編校），285－294，〈岩波文庫〉岩波書店，2007（1941）

編集後記

令和の時代が始まりました。年始より，国内外の各地では人智を超える様々な出来事が生じており，落ち着いた一年とはいかない気配を強く感じています。1期目の編集委員として，本学会誌の電子投稿システムに慣れることに時間がかかりましたが，投稿者はもちろんのこと，査読に関わって下さる学会員の皆様からの細やかなご協力をいただきながら編集作業を進めてまいりました。

第25巻第2号には，4編の原著論文と第25回学術集会報告を掲載しております。論文では，研究者が各々の専門分野において，研究テーマのもつ新規性や現代の看護における課題を探究した成果と共に，行く先を誠実に照らそうとする姿勢が示されています。これは学術集会が取り上げたメインテーマ「看護実践を変えるデザイン力―アクションとしての研究を考える―」の，より良い実践を追求し変化をもたらすために研究者と実践者が互いに研鑽を積み，刺激をし合いながら社会に還元することにも繋がるものであると考えます。今後とも，本学会ならではの充実した取り組みや研究成果を広くお知らせできるよう，編集委員一同，多くの方からのご投稿を心よりお待ちしております。

（編集委員　森本悦子）

編集委員
委員長　増島麻里子
委　員　上野まり　岡田　忍　河部房子
黒田寿美恵　佐藤奈保　鈴木悟子
中村伸枝　野崎章子　眞嶋朋子
森本悦子　湯浅美千代
（敬称略，五十音順）

千葉看護学会会誌に掲載された論文等の著作権は千葉看護学会に帰属する

千葉看護学会会誌
第25巻第2号

令和2年2月28日発行

発行所　千葉看護学会
〒260-8672　千葉市中央区亥鼻1－8－1
千葉大学大学院看護学研究科内
千葉看護学会編集委員会事務局
TEL 043－226－2436　FAX 043－226－2436

代表者　石丸美奈

印刷所　株式会社　正文社
〒260-0001　千葉市中央区都町1－10－6
TEL 043－233－2235　FAX 043－231－5562